

Cappella Accademica 45th Concert

カペラ・アカデミカ第45回定期演奏会

Program

指揮 吉川 紀彦

♪ J. パッヘルベル：3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノン

♪ A. ヴィヴァルディ：弦楽のための協奏曲 二長調 RV121

♪ T. アルビノーニ：弦楽とオルガンのためのアダージョ ト短調

♪ T. アルビノーニ：弦楽のためのシンフォニア ト短調

休 憩（15分）

♪ G. テレマン：弦楽のための小組曲「ラ・リラ」

♪ C. シュターミッツ：オーケストラ・クアルテット ハ長調

2014年11月16日（日）13：30開場 14：00開演

浜松市地域情報センター ホール

主催 カペラ・アカデミカ

● 演奏中にお手持ちの時計やアラーム、また携帯電話等の呼び出し音が鳴らないようお願いします。

Cappella Accademica (創立 1974 年 9 月)

吉川 紀彦 (指揮)

Norihiko Yoshikawa

大阪労音管弦楽団にて練習指揮者兼ヴァイオリン奏者として活躍。1970年に大阪市民管弦楽団の設立に参画。1972年浜松に居住を移し、1974年9月にカペラ・アカデミカの設立に参画した。ヴァイオリンを比企康蔵、藤田康夫、指揮法を濱田徳昭の各氏に師事。輸送機器メーカー等を経て、現在、アルカート（海外技術コンサルタント業）代表、一般社団法人日本経営士会会員、カペラ・アカデミカ代表を務める。

カペラ・アカデミカ

カペラ・アカデミカ (Cappella Accademica) は、イタリア語で『教会所属の音楽院』ほどの意味で、古典音楽研究会の合唱団とともにバッハのカンタータ、オラトリオ、受難曲等を可能な限り原曲に忠実に演奏することを目的として、浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家故濱田徳昭先生により命名され1974年（昭和49年）9月2日に誕生した。その後合奏団独自の定期演奏会を年2回及びその他の演奏会を2～3回開催し、室内アンサンブルのインテリメイトな世界を創り上げること目標としている。

<u>1st Violin</u>	<u>2nd Violin</u>	<u>Viola</u>	<u>Cello</u>	<u>Double bass</u>
今井 重人	磯貝 ゆり	木下 正明	澤出くみ子	小林 哲
◎釘本 英範	加藤 恵一	桑原 義彦	杉浦 敏彦	早川 浩一
永井 正子	末田 良	吉川 紀彦	浜島 吉男	
水谷 緑		◎はコンサート・マスター		

曲目解説

■J. パッヘルベル(1653～1706) : 3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノン

12曲からなる作品6はヘンデル54歳の1739年秋、わずか一ヶ月の間に作曲されました。合奏協奏曲はイタリアのコレッリによって作られた形式で、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリンなどからひと

りの独奏者が選ばれて独奏楽器群（コンチェルティーノ）を形成し、合奏全体（リピーエーノ）と交互に演奏していきます。作品6の12は、全12曲の中では比較的馴染みが薄く、特徴が弱いと感じる方もいらっしゃるでしょう。しかし、この作品独自の魅力は十分に備わっています！ 第1楽章のプレリュードは魂の孤独を切々と訴える深遠な音楽です。そして第2楽章アレグロはヴィヴァルディの協奏曲のメロディによく似ていますが、中間部での目眩く展開される心の嵐が凄く、激しい慟哭さえ感じさせます。第3楽章のアリアの美しさが光っています。中間部のソロヴァイオリンの美しさも心にしみませます。間奏的な短いラルゴを経て決然としたフーガがフィナーレとなっています。一切の飾り気を排したしみじみとした心の音楽は見事というしかないでしょう……。

第1楽章：ラルゴ 第2楽章：アレグロ、第3楽章：アリア

第4楽章：ラルゴ、第5楽章：アレグロ

■A. ヴィヴァルディ：弦楽のための協奏曲 二長調 RV121

メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲といえば、ホ短調作品64が名作中の名作として知られていますが、実はもう1曲、彼がまだ13歳だった1822年に、師であったヴァイオリン奏者エドゥアルト・リーツのために作曲した二短調の作品（オーケストラの編成は弦楽のみ）があります。

裕福な家庭で育ったメンデルスゾーンは、幼児期から厳格な音楽教育をみっちり受けていたわけで、自宅でサロン・コンサートが毎日曜に開かれていたという恵まれた音楽環境も幼い彼を音楽の道に引き込んだことは間違いないところでありませう。そして、忘れてはならないのは才能溢れるお姉さんのファニー・メンデルスゾーン存在であります。そういえば、モーツァルトにもお姉さんがいましたね。さて、こうして彼は既に10代初めから様々なジャンルの作品を次々作曲し、この二短調協奏曲も自宅の日曜コンサートで発表していったのでしょう。ところでこの協奏曲は、1951年にメニューインが自筆府を発見するまで、長らく存在が世に知られておりませんでした。この自筆譜は、メンデルスゾーン未亡人から名ヴァイオリニストでありましたダーフィットの手に渡り、更にその息子を経て、ある個人の所有になっていたものであります。その後ほどなく、別の自筆譜（こちらはかつてクララ・シューマンが所有していた）が発見されたのですが、これら2つの自筆譜は第1、第2楽章の細部が異なっており（特に第2楽章にはかなりの異同がある）、最初にメニューインが発見した自筆譜が初稿、それを改定した決定稿があとから発見された自筆譜だろうと考えられてもいるのですが、実は、メニューインが発見した方は、彼の手がかなり入っているのではという疑惑の線も濃いようですね。このあたり、断定はできませんが。原点版としては近年「新メンデルスゾーン全集」において、2つの稿を併載したものが出されているそうです。

さて、第1楽章（アレグロ・モルト）はソナタ形式なのですが、再現部の扱いなどはやや変則的。またユニゾンの総奏による第1主題は、パロック風。第2楽章（アンダンテ）は、冒頭のオーケストラの主題

こそ優美で古典的だが、独奏が加わると俄然ロマン的な感情が加わり、ロマン派の作曲家らしい顔を覗かせます。次の楽章にはそのまま休みなく続きます。第3楽章（アレグロ）は、一転して澆漓とした舞曲風の主題による Rond 風のフィナーレ。即興風のカデンツァの挿入など、短いながらも独創的な終曲であり、この3楽章が最もメンデルスゾーンらしいと感ずるのではないのでしょうか。

■T. アルピノーニ (1671～1751) : 弦楽とオルガンのためのアダージョ ト短調

メンデルスゾーンは管弦楽のために作曲したいわゆる普通の「交響曲」が5曲ありますが、それとは違った「弦楽器のためだけ」の文字通り弦楽器だけで演奏される交響曲も作曲しています。作曲された年代を見ると、いわゆる「普通の交響曲」よりも先に作曲されていますから、彼の若いころ（10代前半）の作品ということになります。今日演奏する第11番は一種の習作のような楽曲で、すでに彼の個性もうかがえる5楽章で構成された曲です。演奏頻度も比較的高く、スイス滞在中の作品で、第2楽章のスケルツォなどには、スイス民謡も素材に使われています。この第2楽章の『スイスの歌』には斜線が引かれており、削除したのかどうかは不明。(オイレンブルク版の楽譜では全4楽章の付録として収録されています)。また、この2楽章では、一連の作品中唯一ティンパニとシンバル、トライアングルを伴いますが今回は省いて演奏します。

第1楽章：アダージョ-アレグロモルト、第2楽章：スケルツォ、第3楽章：アダージョ、第4楽章：メヌエット、第5楽章：アレグロモルト

■A. ヴィヴァルディ (1678～1741) : 弦楽のための協奏曲 二長調 RV121

イタリア・バロックを代表する作曲家。イタリア北東部のベネチア生まれ。ヴァイオリン奏者及び理髪師であった父から音楽の手ほどきを受けました。ヴィヴァルディの代表作と言えば、ヴァイオリン協奏曲集<和声法とインベンションの試み>の中の「四季」がよく知られていますがヴィヴァルディが生涯に残した作品総数は、実に600曲以上とも言われています。優れた弦楽器奏者でもあったヴィヴァルディは、作曲した器楽曲の内、約80%が独奏楽器のための協奏曲となっています。これらの膨大な数の協奏曲集は、古典派音楽を代表するバッハ、モーツァルト、ベートーベンといった、後世の音楽家達に多大な影響をもたらしたといわれています。本日演奏する曲はコンチェルト・リピーエノと呼ばれている独奏を持たない弦楽合奏のコンチェルトです。軽快なリズム、哀愁に満ちた旋律、あふれるインスピレーション。ヴィヴァルディの魅力が味わえます。

第1楽章 アレグロ・モルト、第2楽章 アダージョ、第3楽章 アレグロ

■G. テレマン (1681~1767) : 弦楽のための小組曲「ラ・リラ」

テレマンは後期バロック音楽を代表するドイツの作曲家で、生前はバッハを凌ぐ人気を博し、40歳以降は北ドイツのハンブルクで活躍しました。18世紀前半のヨーロッパにおいては随一と言われる人気と名声を誇り、クラシック音楽史上もっとも多く曲を作った作曲家として知られています。自身もオルガン、ハープシコード、リコーダー、リュートなど多くの楽器を演奏することができ、特にリコーダーについては高い技術を有する名人でした。今日演奏する組曲は、弦楽合奏のために書かれたものです。

第1曲 序曲 (アダージョ - アレグロ - アダージョ)、第2曲 メヌエット

第3曲 ラ・ヴィエル (アレグロ)、第4曲 シチリアーナ (アダージョ)

第5曲 ロンドー (アレグロ・ヴィヴァーチェ)、第6曲 ブーレー (アレグロ)

第7曲 ジーグ (アレグロ)

■C. シュターミッツ (1745~1802) : オーケストラ・クアルテット ハ長調

18世紀半ばのヨーロッパで、優秀なオーケストラを擁し、名声をとどろかせていたのが、マンハイムの宮廷です。カール・シュターミッツ(Carl Stamitz)は、父、ヨハン・シュターミッツとともに、ドイツのマンハイムで活躍していた音楽家群、マンハイム楽派の中心人物です。1745年に、マンハイムで生まれ、父親からの音楽教育を受けました。ヨハン・シュターミッツは、マンハイム楽派の基礎を築いた人物で、モーツァルトやハイドンらにも大いに影響を与えました。マンハイム楽派のシンフォニーなどのオーケストラ作品は、推進力のある上昇音型、ダイナミックなクレッシェンドで知られています。カール・シュターミッツは、マンハイムで活動した後、パリに赴き、盛んに作曲活動、演奏活動を行い、その作品は、パリのコンサートの中心でもあったコンセル・スピリチュエル(18世紀フランスの演奏会・音楽集団の名称である。「宗教音楽演奏会」の意味)でも演奏されました。カール・シュターミッツは、数十曲のシンフォニー、さまざまな楽器のためのコンチェルト、室内楽を残しています。

第1楽章 アレグロ・アッサイ、第2楽章 アンダンテ・マ・アレグレット、第3楽章 プレスト・アッサイ